

## 残照か黎明か : 評論

著者	湯川, 靖洋
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 2
ページ	1 0 - 4 1
発行年	1913-11-05
その他の言語のタイトル	残照か黎明か : 評論
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6281">http://hdl.handle.net/2298/6281</a>

## 殘照か黎明か

蜻

Die Wahrheit war schon laengst gefunden,

Hat edle Geisteschaft verbunden,

Das alte Wahre, fass'es an. (Goethe)

遠き過去に發見されたる多くの眞理は吊鬼灯つるしほづきのやうに並んだ紅提灯の三桁の紋にも燐銀の繡が微かに輝やく一文字にも繼ぎはぎした淺黃幕にも觀客のごよめきを押ゆる櫓の木きの響にも、恰かも偶像の殘照でもあるかのやうに残されてゐながら無智なる批評家ビリーコックハットクリチズムの不注意と低級と無智と無遠慮とを嘲笑ひつゝある。

Henry Arthur Jones が或る時に村芝居の醸す情緒を味はんとして堀立小屋のハムレットを立ち見してゐた時にビリーコックハットを被つた青年が大聲にかうわめいたのを聞いた。

『ハムリイクがつまんねねブランクバースを勿体つけて喋しゃべ々つたり怒鳴つたりしたつて何になる、廢やせや面白くもねね、さあダンスかコオラスかをやらうぢやねねか、乃公は娛樂たのしみたいんだ。何だれ葬式ななんか有難がるものか』

私が近頃伊藤痴遊の新講談を聴きに行つた。彼は星亨の壯士であつた以來自由黨員として多少の功勞があつたからであらう政友會代議士候補者である爲めでもあらうその日は多くの辯護士の家族が棧敷に屯してゐた。痴遊は浪士大江卓と後藤象次郎との關係を講談した。

風雲を得ると得ないとは極めて短かい瞬間の機會によるので池中の蛟龍も汚泥に埋れて終まうか天下を風靡するか賢か愚かそれは平凡な軌道を平凡に歩む時に電のやうに道を横るに依つて定まる。大江卓は今七拾五萬圓の借財を負うて年六十猶家を成さない位だが彼は決して凡愚ではなかつた、彼は例の陰謀事件から爲す事計る事盡く失敗するので不審を抱いて探るどそれは凡て後藤象次郎の爲めに辟けらるのだと判明した、彼は百兩の懸賞で刺客を放つたが刺客は象次郎の爲めに捕はれて首を求めたのは大江だと知られた。象次郎は然らば五拾兩をやるから大江を連れて來い大江は圖々しい奴だから必ず來るといふ、刺客は島原に待つてゐる大江にさう告げると大江は行かうといつた。

痴遊の講談が終ると辯護士の奥さんは立ち上つて隣のうづらに居つたカイザ髭を捕へ、饒舌を初めた。『どうです堪まりませんね、實に維新時代の浪士の氣風つたらたまりませんね首を覗つた男も男なら覗かれた男も男ですわね、あゝした男が男といふのでしやうね、實によく穿つてますよ、痴遊位の講談になれば一種の藝術ですわね』

私はこの時から斯ういふ特志の批評家を『辯護士の奥さん』と呼んでゐる。ビリイコツクハットの男が必ずしもビリイコツクハットクリチズムでなかうと同時に辯護士の奥さんが盡く私のいふ『辯護士の奥さん』でないのは更にその隣席に居つた辯護士の嬢さんは懷中に美しい Memoranda. を持つて居たが極めてつまし

く坐つてゐた事でわかる。た嬢さんは若くある新しい時代の新しくある可き女である、た嬢さんの學識が如何に深いか如何に淺いかの問題は決して起らしてはならない、た嬢さん自身は新しくあらんが爲めに、麥藁の細い管からヘルモットをすゝらんが爲めにそしてそれを他人に標榜する事の意志がた嬢さんに知られないでひそんでゐるだらうが爲めに、た嬢さんは革製ノートを持つてゐる、人は之をつまらない虚榮といふ。

私は元より『ピリイコックハット』を被り辯慶編のだぶだぶしたツキイド服を着た青年であり饒舌なる辯護士の奥さんであり、且つ美しい革のノートを懷に入れた新時代のた嬢さんであるであらう、自身に於いて藝術批評家であるといふ確かな信念を有してゐるのでないのだが今までに『舞臺に對する熾烈な愛』を持つてゐたといふだけを前提として置かねばならぬ。

Gliebende Liebe fuer die Buehne. と置かゞ云つた言葉は私の純なる心を現今まで舞臺に向けしめたのである。

『musical comedy』を見に何所かへ電話を掛けようかとならうか 十二夜を見に His Majesty's Theatre の附近へいこう。Samson Agonistes の爲め Elizabethan Stage Society のメンバー Arthur Pinero の爲め St. James の後敷で John Bull's Other Island の爲め Court Theatre の追込で Bach の樂劇で Oxford Street の活動寫眞を見たりしてゐたらう。Actor's Association と Drury Lane 劇を行かう。

斯う Gordon Craig が云つた。

私達は長江教授から Pathos のない Lessing 座の藝術を聞く事も出来れば獨逸座も自由劇場も <sup>アンシアター</sup> Lusttheatre の巡回興行の話も Gerhart Hauptmann と Manuice Mactelink と Anton Tschschoff などの <sup>アンシアター</sup> 作物が Kleines

Theater & Deutschs Theater & Intimes Theater & Residenztheater やらに於ける評價と名聲と觀客の種類とを聞く事が出来る、浪花政吉の浮れ節芝居の爲めに常盤座の木戸に入錢を仕拂ふ事が出来る、岩見重太郎一代記を見る爲めに電氣館を訪問し、井上政夫のベルスを見、左團次の夜叉王を見、小團次の仁木彈正を見、熱海と大井と丸山とを見るべく大和座の平土間に坐することもあつた。かくて希臘古典劇とメエタアリンク近代戯曲論とを同時に包容し得た時に卑俗であり且淺薄であるビリイコックハットと辯護士の奥さんどノートとを有てる令嬢とを標榜せる者は彼自身に相當せるだけの Bühnenbearbeitung を得るであらう

Symbolismus,

Typhus,

Konventionalismus,

Individualismus,

Subjektivismus.

個々の人々はスフィンクスの謎と死といふ謎とに悩まされて彼等の肉体は彼を解き得る日に死滅するといへ人類には停滯と死滅とのなき縦の統一が永久にして不變に續いた來た。自然的であり人類本位であり一元的であり自由であり實證主義であつた古代の思想は中世に至つて超自然的であり神本位であり二元的であり不自由であり理想主義である思想に移つた、象徴、模型、因襲、個性、主觀が縦の統一と認めらるゝならば斯くありし古代思潮が彼様に移りし中世思潮を過て近代に至つたとして此所に吾人は永遠に螺旋塔の階段を

昇りながら様々の彩色玻璃を透したる世界觀を経てゐる事を悟らねばならぬ。

曾ては神は眞であつた。天國は權威であつた。大和の國五條より南へ五里は三里の險峻な阪路となる、藍玉を溶かしたやうな紀の川を九度山村に渡れば小さき人間は偉大なる自然の爲めに先づ彼の有せる魂を奪はれた、山腹を挟りとつた道路を左右に導かるれば谷は悲哀と脅迫とを以つて冷酷な暴力を用ひるのだ、苔と雲と山蛭とを含んだ古木は黒く路を埋めて雨風に荒らされた巖石は柔き足の肉の血を啜り熱を強奪し狼のやうに旅人を苦めるのであつた、あらゆる疲勞と凡そ困憊を授けられた旅人は再び三度岩にあへぎつゝ辛うじて小さき堂宇に跪いた時高臺の原野は尙幾町の杉並木を以つて旅人の目を遮るのであつた、原野の一隅にある秋の哀愁はあるかなきかの黄き女郎花に溢れてはゐるが其所は彼の石重丸が母親を女人堂に残さねばならない靈地であつた、禁制された女性の一步の不謹慎が膝行者といふ不具の身を克ち得る恐ろしくも勿体ない土地は女郎花の咲くのを女性に羨ましむるばかりであつた、自然の威力は如何に冷たく人類の境地が如何に温かいかを極度に知らしめて後に高野山眞言の秘法は當時に於いて絶對の眞理であつた、佛は奥の院に夏も氷に閉ぢられて確固に存在した。

肥後國熊本市の西にある本妙寺の境内には加藤清正朝臣が或る癩病患者にとつて絶大の權威を有しつゝ其の墓底に埋まつてゐる、石に刻み込んだ文字は三百年の昔と少しも變らない事がせめてもの心やりとして赤く爛れた皮膚と臭く腐れたる血管とを持てる肉塊が怖しきまでに努力や熱心を示して南無妙と叫ぶ。醒い風が狸の巢からのやうに靡いて堂宇を圍む青葉に毒氣が籠つては凡てのものを呪うて止まない。茲に加藤清正は三百年の生命を保つて存在するそれは眞理である、生の要求を現在に努力しつゝも生活に於いて過去の人々

と見做さるゝ高野參詣者や本妙寺祈願の漂泊者は現代の思潮圏外にあつて餘滴を貪りながら愛慾も凱歌もな  
く只管の執着と痛ましき呪咀とを續け行く中に彼等個々の眞を發見するのである。

けれどもそれらに存する眞は吾人の生活と全然沒交渉であらねばならぬ、猶太の野にアネモネの花は依然と  
咲き羅馬七丘に百合の花は尙白銀の輝きを帯びて疲れたる詩人を育むとはいへ、かくありしものゝ眞は碧き  
細波に生を樂しみつゝある眞珠貝を全滅せしむべき黒潮の暴威に葬られてしまつたのである。

神の造つたあらゆる生物いさゝかの中で、賤しき「人」よりも貴きものは亞刺比亞人にとつて馬であつた沙漠の船と高  
原の馬はやがては「アラア」と「ジイン」との墮落を防ぐに力あるものでなくなつた。

薄暮かすかに迫る。壁にかけた女の肖像の色がだんだん薄暗い灰色に變つて來る、その灰色が蒼ざめた色  
をして凡てを蔽うてしまふ。

The sad Spring Twilight, dull, forlorn

The menace of the dreary night;

But in her face, more fair naht morn

A sweet suspension of delight

かくて Arthur Symonds & Spring Twilight は茜の色を惜ませて消え行かうとする、過去に於いて絶対に眞で  
あつたものが必ずしも現在に於いて絶対の眞であり能はぬ、過去に於いて絶対の權威を持つてゐた孔子も釋  
迦もキリストもマホメットも現代に於いては『春のたそがれ』よりも果かなき運命を齎した、彼等は凡て眞で  
あつた、けれどもそれは眞であつただけであつて眞であるといふ事の證明ではない、人類は不滅の永遠に螺

旋塔の階段を踏みて些少の、刹那の躊躇も逡巡もないのである

神が自然を超越して眞に存在した時代は十六世紀に至つて科學の勃興の爲めに全然破壊された、天文地質にコペルニクスやケプレルやラズス・ライエルがあつた、ダアビンがあつたスペンサアが叫んだ、ヘーデルが叫んだ　ワット、エヂソンがあつた、神は霞の衣を奪はれ強烈なる白日下に曝露されて彼の價值はアミールよりも低い位置をさへ保つことの出来ない傷まじさに棄てられた、未來を知らない無智なる者はやがては造物主に代つて萬能者たる者は科學であるべき曙光を見出したと思つて狂喜した、けれどもそれも單に大なる空望として殘され慘憺たる悲哀と絶望とを導いたものに過ぎなかつた、科學を知らざりし過去の人類には不安の凡てを神に依托する事が出来たけれども科學の鋭い壓力が加はつて灰色の劔から縦横に裂かれた肉、破られた皮膚から迸り出た赤い血潮は砂漠の沙に空し滲みて遙かに望み得た椰子の葉影は目まぐるしくも塵埃のみ狂ふ都會の水氣なき屋上と變じ波濤逆卷く大平洋と變すればまた雪のやうに盛り上つた白雲に移りて遂には絶望の暗示が喜望峯の彼方に現るゝと同時に凡ては消え失せる、猛惡なる北海の冬波と惡闘を續けてゐる海賊をいやが上にも惱ます彼の氷山よりも、三角帆を一杯に張りつめてスカンデナビアの峽灣を漂泊する商船を襲ふ彼の雲よりも、それより以上の冷たきものが人爲によつて製せらるゝ事を知つた時に今迄に忘れられてゐた内部に埋もれてゐながらも常に吾人を支配しつゝあつた靈を無視してゐるのに氣づかないで唯物觀を過ぎ自然主義を過ぎ凄じき *Fin de siècle* の懷疑から現實の曝露と肉の當面の享樂といふ *Decadant* に陥つて世界の破滅を思はしむるばかりであつた、

『今夜の女王の美しさは奈何だ、あんなに美しく見た事はない　塚穴から出て來た女のやうな、死んだ



女のやうな、

Wie schoen die Prinzessin Salome heute abend ist !

女王の足は銀のやうだ薄紅い鳩の足のやうだ 銀の花だ銀の花だ、奈何して今夜はあゝまで美しいのだらう』とばかり云ひつづけてゐたユンゲリアアは

『た前はあたしのいふことをわきまだらうね、陛下が何とわつしやたつてあたしのいふ事を聴きさへすればいふのだよ、ね、ナラボートやあたしは、あたしは豫言者をこゝへ連れて來てた呉れといふのだよ、いゝね、私のいふ事をわきまといふのだらうね、

Wenn ich in meiner Saefte unter dem Tore bei den Haendeln mit den Goetzenbildern vorbeikomme,

will ich fuer Euch eine kleine Blume fallen lassen, eine kleine gruene Blume

ね、いゝだらう、ナラボートや、ナラボート、あたしを御覽、あたしの眸を御覽、あたしの顔を眺めてごらん、あたしは知つてゐる、た前はあたしのいふ事をきいてた呉れだと知つてゐるいゝねさうに違ひない

Ich weisse es wohl !』

サロメの明眸に酔うたためにナラボートは華やかな飾太刀を抜いで自らの血をサロメの『鳩の足』に塗らねばならぬ運命に落ちた、併しながらそれが彼の享樂、門前で緑色の花を投げてやらうと云はれた言葉の嬉しさ街を行くときちよつと位カーテンの影からお前の顔を眺めてやらうよ事によつたら一個の笑ひを與へるかも知れないよと云はれた銀鈴の聲の享樂のために彼は自及したのであつたとすれば而してこれが Oskar wilde の享樂であるならば、世紀末より續いたデカダンが如何に或るものゝ權威を認めたかを知りたいと思ふ

而かも一方に世紀末より現代までは既に十年を數へた。ナラボートの享樂は直接に吾人の享樂とならない如く世紀末の悲哀と懷疑とは直ぐに吾人の悲哀と懷疑であつてはならない、雲雀のやうに人形の家で住んでゐたノラは新しく目覺めて家を棄て、アーサアシモンは春にたそがれたけれども Weckelind にはやがて

Erneuerungs-erwachsen があり Hauptmann には Vor Sonnenaufgang があり沈める鐘は黎明よと永遠に目醒めを告げつゝあるのだ、ノラに於いて漂泊の旅を起せしインゼン は Gespenster に於いて何んと答へた、所謂『惡魔の雨』にエルステルアクトを起した平凡な室内の横斷面はマンデルスの迷教と盲従と憎む可き偽善とを曝しアルウング未亡人の依然として女といふ弱き名のものであるべきを知らしめた。

Frau Alving, Und siehst du, Oswald, den schoenen Tag da draussen?

Strahlender Sonnenschein. Jetzt kannst du die Heimat so recht sehen.

Oswald, Die Sonne, die Sonne.

Frau Alving, — Oswald, wie ist dir?

夫人を恐れのためには慄れしめ叫ばしめ、跪まづかしめ 飛び上らしめ、狼狽せしめたるを知らないで只 太陽 太陽を、太陽、と七度云ひて、一先づのフォルハングを降ろしたでないか黎明は徐ろに迫りつゝある黎明は徐ろに迫りつゝある。灰色に研ぎ澄したる大なる斧鉞の爲めに偶像は古き木の蝕めるものより脆く破壊されて而かも科學と名づくる斧鉞の内部には流動する靈が存在するのを知つてから其所に春の目醒めは麗しくもかゝやき初むるのである、吾人は第一に科學を知らねばならぬ、米のジェームスがピアスの用ひた名目アラグマチスムを説へて浪漫派は全く生命を失つた、近代主義といふ名を附せられて攻撃さるゝものは宗

教を進化論の基礎によつて宗教進化論を説く科學上より解剖して宗教の科學的價值を論するのであつたが攻撃さるゝ彼等は攻撃する者よりも正しくあつた。

第二に吾人はニイチエの個人主義より學ばねばならぬ、それは現代が主觀の時代に進み來た事を否定するもの以外に正當である、同時に主觀は一元を生み內在研究を生み科學は實在を生み經驗を生みて吾人は『現在理想主義者』となり得るのである、過去に於ける歴史は現在龍南に生きつゝある吾人の智識として包容すべきものであつて過去といふものゝ所有物でない、歴史は現在生の歡喜者の所有物である、遠き未來の憧憬は雲の彼方に所有主が在るのではなくそれも現在生の歡喜者の所有物である、而して吾人はこの根柢に立ちて新時代思潮の色彩玻璃を彼の螺旋塔の窓にあてはめたる觀客席より綜合藝術を研究したい。徒らに砂上に樓閣を築くの罵倒を避くる爲めに尙少しの時をさいて人生觀と藝術觀と新時代と舊時代とを包容し、只管に現在生の所有物を確めんかな。

潜越ながら菲薄なる者が劇術の研究を初めて發表せんとする時其者が論評に對して處女であるとのわざましき卑下からして彼れの臃げなる理解の根底を表白するに何等のやましさが無い筈である、藝術と哲學との關係を説く者、現代思潮の上に立ちたる劇評者と自信すれば穴勝ちに言論餘りに迂遠なりとの嘲笑を受けたくない、言ひ換へればビリイコックハットの位置の表白である、彼の研究の徑路である。

強いて分類すれば科學は眞の探究を最大の目的とし道德は善の完成をつとめ藝術は美の欲求を標的とするも

のであるけれど科學も道德も藝術も必ず人生に於いて差等なき要素である、所謂「生きむとする欲望」が人生である、一個の頭腦が萬能にあらざる爲めに彼れの欲望は表面上幾多に區劃さるゝとはいへ彼等は等しくたゞ生きむとしてゐるのである、彼等から生きむとする欲望を去つたならば人生は空洞のごとく暗虛を殘すのみとなるであらう、而して科學と道德と藝術とは平行して行くものではなく等しく人生である以上渾然たる一致の要求を受けつゝあるべきである、時代によつて科學の盛大の爲めに道德と藝術とが隱されたといふ人があるとするれば私はその迂を笑ふであらう、科學の進歩は人生の進歩であつて道德と藝術とも等しく進歩してゐるのではあるが不注意なる人類は等しく進歩しつゝある藝術と道德とを失念したからであつたからだらうと笑ふであらう、若しも道學者の痛嘆するごとく現代道德と武士道とが地を拂つて早や救ふ可からざるに至つたならばそれは大なる世の悲觀であるが事實は決して武士道と道德との頽廢ではなく新しき道德が各個の内部に萌芽したために過去に於いて權威ありしものがその權威を消失したに過ぎない悲觀すべき事ではなく喜ぶべき事なのだ、浪漫派や象徴派が滅亡することの喜びは新浪漫派と新時代象徴主義が發現するの喜びに等しくあるが如く舊き偶像の權威を失ふことの喜悅はやがて新しき時代の權威が隆盛たる證明であらねばならぬ、

例へば、龍南會の舊艇庫は數をくゞり畑地を横つた森の端れの水邊にあつた時その入口の傍に龐大なる海軍式端艇が朽腐せる儘に死せる鯨のやうに伏せられてあつた、その廢殘の艇は鎮遠號の舊艇であつたが五高龍南會端艇部創立時代に海軍からか文部省からか寄附されたものであつた、然るに或る年の委員は廢物を放棄して置く事の無意味を知つて其の端艇を賣却した、事實は當然の所作の結果であつて龍南會が博物館でない

以上、其の物の効能の消滅した以上、その所有權を無くしたつて少しも不正當ではなかつた、過去に於いて鎮遠號の紀念物であつた所が現在に於いてはその紀念物たる効果のない物品ならば當然棄てらる可きものである。過去の權威が現在の權威と同一でない道德は當然棄てられて毫も差支へはなく現在の參考たる可くれば即ち道學者か博物館に陳列さるゝ事となる、過去の道德が現在消滅したと雖も其の故を以つて現在新道德の頽廢である證據とはならない人生は生きむとする欲望である、生きむとする欲望は科學と道德と藝術との一致せるものが常に最良の手段として達せらるゝならば依然として其所に新道德が發芽し科學が益々盛大であると同時に藝術は殘照か黎明かの色彩を凡愚の時に差別しつゝ依然として人生の要素として存在する事を肯定せねばならぬ、言ひ換れば科學は眞を道德は善を藝術は美を目的とする表面上の差異を有するけれども内的價值に至つては藝術の裡にも眞は嚴として美と善と共に共存する眞とは何だ、眞とは一つの價值を持つ事に外ならないのである

極めて大略ながらビリイコックハットの青年にして辯護士の奥さんにして且つノート懷中のお嬢さんなる私の理解内にある現代思潮と藝術觀との根柢を表示した、その不備は他日の填補に任して龍南に現在生を樂める者の眺め得る不遜なる藝術觀を續けて見やう

藝術の終局は遂に第三帝國の創立であらねばならぬ

明のドイツの藝術としてフリードリツヒが捧げたものはイブセンが Kaiser und Galilae に於いて豫言したる

### 第三帝國であつた、

ニイチエの孤獨は超人を生んだごとくに人生は果して永久に孤獨であらうか、人は作物と人格との共通を極めて少なく考へてゐるけれど彼の作物が彼の人格の反映ならば眞の藝術は其所に眞の人生を惹起し得べく而して彼は遂に多數の共鳴者を得て決して孤獨ではないのである、同情は有力な共鳴であると同時に反感も有力な共鳴である、強大な反響は遠く擴がつて發聲者に復歸もせず感知もされない時でも彼は、其の山彦が復歸を思はせ感知を得させた時以上に多くの相對者を得てゐる筈である、悲劇の最大なものは孤獨の悲劇である事其所に多數の悲劇が形づくらく、人文熱望の悲劇の竟極は決して孤獨ではない 個人の悲劇も神の觀念の悲劇もゾロメトイスの悲劇も凡ては孤獨の悲劇の彼方に多數と共同とがあつたのだ 隱者が遁所を發見せんとする悲劇は即ち多數と共同である 彼の腦髓を支配するものが社會であるが故に孤獨の殘骸を隠さうとするの悲劇である、個人主義は家族主義の前提である、家族主義は一種の個人主義であるが故に個人主義がやがて國家主義となつた、時代精神の重量と人文の殘屑で埋められたドイツの心の復活は物質主義が理想主義で破壊さるゝ事にかゝるのだとワグネルが云つた、それがフリードリッヒの豫言であるが故に個性の悲哀は『通過』さるべきものであるのだ、孤獨の悲劇は袋の底ではなく續くだけの暗梁が盡き果つれば川は明るく海は擴くある、ニイチエとワグナーとゴジマ、ワクナー、リストとの交情は一度暗梁に導かれて孤獨の悲劇となるけれどそれはニイチエの『深い—深い—永久』ではなく金と銀との衣類と紫の上衣と豹の皮とをつけたツアラトウストラが云つたごとく『圓熟した汝よ私の居る第三帝國へ來ないか第三帝國は神を呼ぶのだ汝の帝國へ』行かないといふ終局はなかつたのである、

然しながら私はビリイコックハットを被つてゐる、生半可な辯護士の奥さんである、綺麗な革製のメモラン  
ダンを懷中にした新しがるどころの娘さんに過ぎない、私はニイチエでないワグナアでない、況して私は  
豹の皮を肩にかけたツアラトウストラではないのである、私は第三帝國へ走つて行く事は出来ない、私の目  
の前には十七個よりもつと多く幾十幾百の鳶色の女が舞踏してゐる、多くの鳶色の女の凡ては私のスフィ  
ンクスの影である、私の多くの「ラビリンズ」を私は見別ける事は出来ない、内よりの欲求が私をして過去の  
ものであつた長い獨白を叙しめるのであるのだが私はファウストを仰ぎ見る事も出来ない弱き者である

Have nun, ach! Philosophie

Justerei und Medizin,

Und, leider! ach Theologie.

Durchaus Studirt, mit heissem Bismuth.

ファウストは憊う嘆く事が出来たけれど私には「ヅルヒアウス」がない私には菲薄と幼稚と低能とがあるだけ  
だ、たゞ Ich armen Thon があるだけで生意氣にも第三帝國を夢のやうに言ふ、何といふ錯誤であらう、何  
といふたゞましきであらう、けれども娘さんはノートを抱いて居つた、辯護士の奥さんは饒舌を續けた、  
ビクコックは矢張り鍋のごとき格好を代へない、ペダンチシユ街學的でさへあり與はぬ弱き者と云へ純なる心は不斷に舞  
臺に對する熾烈なる愛を有せしめたのに只管頼つて行かう

舞臺に對する熾烈なる愛は藝術の高級をのみ現在に撰擇する事を許されない、彼れは東雲座に天勝を見ねは

ならなかつた、彼は大和座に紋彌を聴かねばならなかつた。彼は常盤座に前田八重子の顔を見ねばならなかつた、彼れは世界館の大向に軍人と共に梁川庄八を喝采しなければならなのであつた、而して第三帝國は何所にある、市村羽左衛門は奈何だ、中村雁次郎は奈何だ、梅幸は奈何だ、吉右衛門と菊五郎と福助と瑠珣と幸四郎とは奈何だ、近代劇協會と自由劇場と藝術座と東京歌劇團とは奈何だ、

それ等の凡ては龍南の所有物ではなかつた、それ等の凡ては都會の所有物であつた、然るに吾人は現在理想主義者である。龍南に於ける現在生の歡喜者である。ベルグソンの教示を借れば吾人は流動の哲學を加へねばならぬ、哲學に靜止のある事なく凡ては流動の集合である、私達は進化論を知らうとする、私等はアミールを知らうとする、私達は私達自身に於いて流動の觀客であり自身に於いて創作者であれば自身の價值如何が即ち第三帝國の出現に外ならないのである、人生は「面明り」<sup>つらあか</sup>に輝されながら鐵壘から現れた明智光秀の簑のさや鳴る音にもひそんでゐるではないか、人生は花道すつぽんからせり上がる仁木彈正の眉間に滴る生血にも匂うてゐるではないか、人生は復掛けを當てた猿廻與次郎の鞭先に搖れてゐるではないか、カスカの怒聲にオリンプスのごとく動かなかつたシイザアがデシヤス、シンナ、ハメララス、カシヤスの短劍の輝閃<sup>かがやき</sup>を遁れても次の瞬間には『エト、チエ、ブルーテ』と跟かなければならなかつた時の吾人の創作は暴風雨の中に『進軍』と命令した幕果ての第三帝國であるのだ、吾人の創作は他力ではない。吾人は禪であつた。禪は鎌倉武士であつたけれども鎌倉時代の歴史から教へられたものは龍南の現在所有であつた、他に依頼せよとニイチネは言はなかつた。吾人が前田八重子を聴く時に彼の叫ぶ赤垣源藏を聴くのでない。肉の衰への悲哀が人生であつてよいのである、赤垣源藏が『ひんだり手』に提げた備前徳利の中に溶けたる人生は赤垣源藏の人



生ではなく私等個々の人生であつてよいのである、第三帝國は斯様にして私等の間に生れて行くであらう、私は第三帝國の一端を解剖しやうと思ふ

演劇は美術である、

ヅラの自然主義の製産物が「女優ナナ」によつて代表されるとすれば現代に於いてその價值は著しき減少を見るごとく現代の畫は花鳥山水の外觀と吾人の目との單なる交渉を標的とするのでなく對照物の内在的生命と吾人の内なる心との交渉を目ざして突進せねばならぬ

ピカソが伊太利に生れて彼れの獨創を發表した時衆愚は罵つて難解を目的とする畫だと云つた 因襲と俗習に囚れたる衆愚にはピカソの畫の外面のみを知つて畫面を透して躍動する精神を忘れた、衆愚の一人が畫面の難易を超絶して其所に起るスチムングを把持する事に氣がついたならば彼は衆愚なる汚名から許さるゝ 若き群はかくしてフュチュリストを起した、未來派、何といふ抱負の大なる事よ、彼等の前途は希望のみに輝いて醒めざる衆愚の罵倒は些の陰影ともならないのだ

世界大勢の思潮は伊太利のピカソから源を導いた未來派にのみ表はれたのではない 五十年前佛蘭西に Paul Cezanne が現はれた、繪畫は一記號として満足すべきものではない、繪は物を見するといふものではなく繪は靈を感動させるものでなければならぬ、繪は藝術に屬すとの分類を許可するならば繪の目的に達する手段は彩色寫眞の完成を期するものではない筈だ 内在的生命は靜止ではなく流動である、沈黙ではなくて音樂である、音樂は必らず耳から入ると思つたのは因襲であつて本來ではない、凡ては一元である、音樂

の意極は目によつても明らかに達せらるゝ、それは彼のセザンヌより發したポスト、インプレッショニストの目的であり手段であり最後のものであつた。後期印象派は彩色寫眞の無意味を罵つた、後期印象派は北宗派に共通しないで南宗派に共通する、彼等は應舉に反對して哥麁に類似する、氣品の躍動を求めた事こゝにも彼の螺旋塔の階段があつた。

劇場美術に今迄、何れだけの進歩と革命とがあつたか、または劇場美術と劇場音楽とは一致して觀客の目と耳より同時に浸入するか劇場音楽が目如何に映じ劇場美術が耳にどれだけの効果を有するに到つたか、繪畫の美術と劇場の美術とは目的に一致點を見出すけれど手段方法様式に多大の差異あるとすれば小さき私は劇場美術の黎明を感じる事の難きを思はずに居られないのである、

狭き經驗内にて舞臺美術の現在衆は簡單のために自由劇場第六回試演「タンタチールの死」の鐵扉の寫眞を例にとらう、

メタアリンクの象徴は冷酷な鐵扉にあつた。た染と久松とは厚き土藏の壁に隔てられても久松の顔は土藏の窓からより美しくより懐かしく見た時にた染の官能は悲嘆に沈むうちの満足の微動を得たけれどもイグレエヌが持つ蠟燭の灯は氷よりも冷たく闇よりも暗い鐵の扉の穴を透して見ゆるに過ぎなかつた。

「あるんだよ、あるんだよ、こゝに穴があるんだよ、だけでも、ちいぢやいんだ」

タンタチールの聲は闇の裡にて哀れに細つて行くのをあらゆる燥急と煩悶ともどかしさと力なき嘆きとを集めてイグレエヌが狂うてゐる。

この時の舞臺はたゞ一枚の壁であればよいのである、その壁は氷より冷たくあらねばならぬ、冷寒は今迄の

舞臺、例へば源藏徳利に於いて白き雪布と細かく刻んだ紙片とひきちぎつた綿の積みし饅頭笠と赤合羽と仲間  
間の箒であつた、がメタアリンクが「タンタチールの死」の第五幕に言葉にて要求したものは

「薄暗き圓天井の下なる大いなる鐵の扉の前」

ただけである、『大いなる鐵扉』で「あらゆるものより冷たき」冷めたさを表はし『薄暗き圓天井で』闇より暗  
き「暗さを興へねばならぬ、瞳に映るものは薄暗きを限度とするけれど我等の直觀に映るものは「闇」を極限  
とはしない、饅頭笠に積る雪の冷たさはいつまでも雪の冷たさを變へないがイグレエムの前の鐵扉の冷たさ  
は級數的に増加して行く、五郎正宗が雪の夜に水を溶びて昏倒する舞臺は絶息が終局であればいゝのだがイ  
グレエスは死より冷たいものゝ無限を興へらるゝ、こゝに舞臺のフュチリストが要用であり且つポスト、ア  
ンプレツシヨunstが要用であるのだ、

寫眞から想像して見ると自由劇場の舞臺は石を積み上げた中に鐵扉をはめた壁の畫と、廻廊下の脚柱のやう  
な柱二本とである、然しながら其の壁は一直線や半圓の舞臺ではなく屈曲の壁である、平面の舞臺ではなく  
凹凸の背景である、「人間の高さ程の二階屋根」ではなく見上るやうな高さである、同一の大きさの石が積み上  
げてあるのでなく類形でありながら破調を生む石の區劃である、丸橋忠彌濠端の書割が江戸城の石を平板に  
して均齊にしてある事が過去であるとすれば六菱形よりも簡單なる長方形を用ひて、過去よりも均一ならざ  
る現在を得た、

俳優の化粧術や鬘や衣装や所謂「小道具」やらの單なる一つでも舞臺美術として多大の攻究を要する事は彼等  
が凡て「第六感の誘致」に影響して觀客を額縁内の Illusion と Phantasie との世界に引き入れる役をつとむる

爲めにしなくてはならぬのではあるが私は或る一部の人々のやうに「時代の考證」といふものに重きを置かない例へば光秀の本能寺夜討に桂川畔に陣を敷いた舞臺があるとするならばその夜の彼が事實紺絨であらうとも夜景と篝火と桔梗の長幡とに釣合ふために紺絨であつて少しも差支へないであらう。

Ich glaube, man sollte das Szensche so einfach als moeglich halten: eine Mauer, die Rueckwand eines Plastes darstellend, ohne Saehlen, aus Kykloischen Urzeiten, mit einer Tuer in der mitte, von welcher Stufen hinabfuehren und kleinen Schmalen Fensteroeffnungen. Ich habe mich selbst hierbei nicht an den historischen Stil gehalten, denn das antike griechische Haus hatte ja keine Fenster. (Hoffmannsthal)

假令此の場合に舞臺が氣分劇夢幻劇情緒劇といった種類のそれではなく、リアリストの口吻に適合する程のものであつたとした所が舞臺は歴史と時代風俗の參考品でなき以上は幾分の便宜は寛容されてちつとも構はない、美術は哲學が靜止を基礎としない現今にあつては靜止でなく躍動の集合である可きを期するのであるからそれが直に此所に應用されての黎明が燃ゆる、而かも舞臺美術は單に背景のみに限らない、内容はやがて外貌の支配を受けて錯覺を起すのは人情の常ででもあるのだ。

試みに熊本の劇場建築を例にとつて彼等が果して到底用を爲すに堪へないか奈何かを考へて見ると穴勝ちに棄て去らるべき運命を持てりとも思はれない

元來觀客にとつては壯大にしてたゞつびろくあるよりも寧ろ小ぢんまりと引しまつたのが比較的に好ましくある。例の Kleines Theater は藝術が惱まると經濟の爲めに小さくされたのでもあらうが他に劇場美術の

完成を主眼としたのも事實である、最高級の藝術は多くのビリイコックハットの爲めに罵倒される、眞の藝術要求者と僅少の好事家との爲めに需用者は經濟上の損失から直に破滅する事の前轍を踏まないで眞の藝術要求者と共同して藝術國を建設する爲めには小さき劇場で充分だ、小さき劇場は經濟上の破綻を免れ易いと共に如何なる細心の注意をを許す、我國に於いて此所に成功したのは能樂である、能樂は昔の沙翁劇のやうに背景を用ひない、三番叟でも高砂の松の杉戸である、勸進帳でも高砂の松の杉戸である、

「まかりいでたるは武藏坊辨慶にてさふらふ」

それが辨慶の奥州へ下り行く道中を全く表現したものである、安宅の關に參らうと云へば安宅の關が出現する、背を見せてゐた富樫が正面に向きなをれば安宅の關所内にて辨慶と富樫との對面になつてゐる、能樂が狙つたものが演技者と觀衆との合致せる氣分創作であつて其の間の介在が少くとも簡素、極端に言へば無である故に能樂は如何なる細かき點をも注意する事が出來た、元來が將軍の目前にての最も簡易にして最も充實せる藝術として起つたものであるから素朴な簡單なものであるだけ周到なる注意を各部に集め得た、この細心が能樂といふ藝術の完成を見たのであるから劇場で小さく單純であればある程演劇は完全な綜合に達し易くある、觀衆は演技者と合致を求むるに拘らず大劇場は散漫な介在物の附隨を見る結果が極端にその合致を裏切る事がある、舞臺裝飾が先づ起す情緒を吾等の六感に享けしむる事は電燈の笠と俳優の頭蓋とのみを疑視しなければならぬ彼の屋根裏生活者マルゲンデゴッスタ所謂大向連には沒交渉である、

藝術眼を以つて熊本の劇場を見るは少しく矛盾と滑稽を感じるのであるが大さに於いて小劇場の價值を認むる如きものと同時に形態構造に於いても相當の效果を得つゝある、勿論それ等は單なる「模倣」に過ぎな

い、が、その「模倣」が有効な過去の殘照を面影してゐるのである、寛永天保時代の歌舞伎劇場の法則は間口十二三間、奥行二十間、高さ四間であり、寶曆に發明された廻り舞臺や一世二世長谷川勘兵衛等の奈落せりあげ、三方せりあげ、蛇の目廻し、は葡萄棚や破風や花道と共に或る意味に於いて雄大な權威を持つてゐた。歌舞伎の國は價少き繼承の墮力に押されてゐて踏襲が熊本の旭座大和座常盤座に殘骸のみのやうに見ゐるけれど東雲座に至つては多少の合理を持つてゐるのである。我等の熱愛して止まない歌舞伎は遂に殘照の薄れ行く果敢ないものに過ぎないであらうか。私はさう信じない決してさうは信じない。我等の第三帝國は此の殘骸の上に建てられて明らかな黎明を報ずるのは確かに短き未來である、Wenn wir Toten erwachen, はこの後編に私の述べんとする所の題目なのである、劇美術が起す黎明は枯れた木の破片にも映ゆべきを斯う私が言つたのである、

演劇は文學である。

藝術は常に經濟と因襲とに迫害さるゝ。演劇は娛樂を通したる藝術であるといふ事が、既定の動かすべからざる原則であり科學と道德が人生の要素であると同様に藝術も人生の要素であるといふ事も既に決定された然るに藝術は靈的であつて物質界のやうに當面に起る肉の生活上には往々忘れ易いために無視され輕蔑される、其の高級なる地點にまでの上昇が困難なるためと無智と低級とを表白するためとの輕蔑が與へらるゝのである、科學萬能時代の學者にすら靈が忘れられた運命を有てるを考ふれば現代に於いても一般の衆愚に人生の爲めの藝術が科學と道德と同程度同位置にあるのを知れと強制するは無理である、現代の科學者にすら

藝術無用をいふ憐れむ可き人があり、その人自身が「生きむとする欲望」の衝動を生活せるに氣付かない愚なる人も多いのだから演劇が昔のまゝに娛樂として存在すると信する多くの人を罵るのも無理だ、三部生は生きむとする欲望の手段のための三部生であるが故に二部一部生も同様に生きむとする欲望のための二部一部生である、三部生の頭が雀の鳴聲を發する哲學は等しく二部の土方の叫聲を聞き一部に蚊が陰る哲學となるのを知らないで、衆愚と覺醒者と、即ち理想の作者と一般觀客とはその葛藤を古今を通じて慘しき血を流すことを止めないのだ。

ゲーテは理想を逐へる詩人と「先づ自分達が娛しみるとして人にも娛しませよう」とする衆愚との仲裁者として座長を置いた、座長は衆愚に同情を持たねばならぬ地位にある、詩人は云つた、

O sprich mir nicht von jener bunten Menge,

Bei deren Anblick uns der Geist erlieht!

Verhülle mir das wogende Gedaenge,

Das wider Willen uns zum Strudel zieht.

Nein, führe mich zur stillen Himmelsenge,

Wo nur dem Dichter reine Freude blüht,

Wo Liebe und Freundschaft unseres Herzens Segen,

Mir Goetherhand erschaffen und erpflegen

胸の底から流れ出づる甘き泉を羞恥みながら片言に囁やいて見てその多くは不成功に終り稀れに思ふたや

うに出来上る事があつてもあらしき刹那の暴力は折角の玉を呑みこんでしまふ、何年もの後にふとした事から完璧になる事がある、瞬間に生れたちよつと光つたものゝうちの眞が永久に滅ばされないで残る眞の藝術家に最も不似合なのは小細工である、天は詩人に最上の權を與へた、詩人は座長の爲めにその人權を擲つ事は出来ない、オリンプスの山を崩さないで神々を集め得るのは誰だ、人間の力は詩人によつて始めて啓示さるゝのだ、

けれども座長はたぢろがない、座長は常に百の有眼者よりも千の盲目者を好愛しなければならぬ、詩人の正理を認めつゝも詩人のエゴイスタックに委任する事は出来ない、人權は詩人の手にあり人間の力は詩人の啓示を待つてゐるけれど詩人の啓示を認め得る者は案外に僅少である、座長の理解内には詩人の必持と同時に觀客の種類にある、見物は時間の消費の爲めに來る、見物は散歩と同じ意味で空腹の爲めに來る、Vom Lesen der Journale, wie zum maskenfesten. の見物がある、その顔と化粧と虚榮との爲めに來る女客がある、無感覺が半分で野蠻が半分だ、芝居の後にカルテンシユビールを企圖んでゐる者もあれば、Drinckausenの肉の香を野獸のごとくすゝつて一夜を暴れ明さうと考へてゐるものもある、奈何せ凡ての人間に満足を與へられないなら Sucht nur die Menschen zu verwirren. である、Wort はもう充分だから此の上は Taten が残るばかりだ、詩人も負けては居ないでまた言ひ張る、

私が奴隷でなかつた過去を返して下さい、内から押へ切れないで迫つて來る詩の泉が絶間なく湧いてゐた過去を返して下さい、

Ich hatte nichts doch genug!



Den Drang nach Wahrheit und die Lust am Trug,

Gib ungehendigt jene Trieb,

Das tiefe schmerzvolle Gluck,

あの時の憎悪や愛の力を耗らさないで返して下さい 私の青春を返して下さい

詩人の生命は眞理と幻影の愛にある、眞理と幻影の愛との現實はデレクタアの力によつて舞臺にかけらるゝ時、座長は遂に斷案を下した、詩人は文學者である演劇は文學であるならば詩人の願を許るさねばならぬ、遲疑や氣兼ねある人に調子がのるまい、用兵と同じやうに號令で詩を用かへ強い酒だ、強い酒だ、プロスペクトやマヒエネやヒンメルリヒトやバツサアやフェルデンヴェンドを充分に使用して狭い舞臺にあらゆるものを並べた上、沈着に而かも敏捷に Vom Himmel durch die Welt zur Hoelle へ事件を運んで貰ひたいと座長は云つた、文學者の劇に對する要求が藝術であるためにこのフォルシュビールがあつてから後にファウストが成立した、詩人は藝術の爲めの藝術を叫び自己を藝術の裡に没頭しやうとする、併しながら演劇は觀衆を一要素とする、讀者を念頭に置いてはならないといふ文學が讀者のために出版さるゝ事が事實であるならば劇は觀客の爲めの公演だ、高級人民と下級人民との二部に別れた露國は文學を解する高級の人民の爲めに劇は彼の如くに發達してゐる、

演劇の現在に於ける理想國は露國の Constan Art Theatre である、全歐州の如何なる Stern より勝つてゐる十二人の幹部と二十四人のセコンダリハアツとの外に學生が居る、學生になる爲めには大學卒業である資格と外國語美術音學科學の高級なる常識と、文學の専門的智識とを要し管理者舞臺監督の面前にての入學試

驗は詩、物語等の朗誦である、この學生が幾年もの經驗により或は舞臺監督となり或は俳優となる、脚本が純文學である外に演者と觀客とが文學的であつて後に劇は文學である所の第三帝國は茲に黎明を示すのである、

現代獨逸の寵兒の一人ヴェデキントは俳優である上に、有名な Kammermeister の作者である。而してこの次に起る問題は現代文學の傾向と進歩せる劇との關係である。

生きむとする欲望が人生であるといふこと、その人生に於いては藝術と科學と道德とが同位置に溶け合つた要素であるといふこと、その二つが私の根本理解である、生きむとする欲望は舊きものゝ繼承ではなく舊きものゝ與ふる新しき意義によつて達せらるゝことが螺旋塔の上昇である、イブセンの室内横斷面は（彼の脚本の多くは同室内にて短時間の連續を示す）ノラに於いて極端なる新思想と舊思想との衝突であつたが滑稽にして卑俗なる「天保老人と明治人間との衝突なる壯士芝居或は書生芝居」ではなかつた、イブセンの新舊衝突は生の欲望より來た覺醒と夢生安逸を願ふ心との衝突であり書生芝居は空漠な形骸の無意味なる衝突であつた、生の欲望が靈と物質との兩面即ち外様と内在との連鎖であるが故に小説にては言葉と外形とのみの寫生は當然滅亡の運命を有つ、容貌と服裝との細密な寫生は疲勞のみを得て効果を得ない、性格描寫は更に進んで内在する靈の躍動の描寫を事件の發展と共に進めて行かねばならぬ、近代小説の生命は勸善懲惡でなく筋の報告であつてはならない、然るに洛陽の紙價は生さぬ仲と百合子の爲めに高められた彼れに於いてさへ Ebers, Jensen, Heiburg がもてはやされてゐるものゝ小説でない事は三萬を賣り盡した生さぬ仲は小説でなく家庭講談であるといふ事である、此の矛盾は聽て所謂新派劇の凋落が現在に於てすら前兆としてのみ見ら

る、所以である、劇は先覺であつて後進者ではない筈だ、家庭講談百合子が小説と認めらるゝ間は高田、藤澤の生命が餘喘を保つであらう、煙草に點火する爲めにマツチを磨る、マツチが消えかゝる、熱心に炎を保護する、炎が辛して軸に燃えつく、直ちに煙草は點火さるゝ、其の時に漸う勢を増して來た炎にはもう要用がない、要用がない時は路傍に放棄して殘快ある譯がないのだ、小説の藝術たるを知る階段——螺旋塔の階下に達する爲めの階段——は塔に在つて毫も必要を感じない、當世書生氣質乃至硯友社は現今にその價值はなくとも棄てられた過去に價值があつた、內的生命の把束を求めて何の手段によるかは新浪漫派、新時代神秘主義、又はメタアリンクの蜜蜂の象徵主義にある、社會劇は我國に成不成さへ別ち難いけれど神秘象徵は「復話の日」に尙發見されなかつた彼のイブセンの第三帝國の完成の爲めの努力であるであらう、劇文學の研究として私は不遜ながら彼れの傳説國劇ファウストと我が傳説の國劇安珍清姫の道成寺とを對比し春雨傘の曉雨または近松の生玉心中の嘉平治と Maria Magdalene (Friedrich Hebel) とを對照し Oscar Wilde の Salome と振袖火事の七と吉三とを比較し雨雀の第一の曉か勇の夜か或は默阿彌物と Gogol の Nachtsyi とを比べて見たいと思うがこれ等は當然この稿の後編「我が劇と第三帝國との交渉」の部に入る可きであらう、これらの二つ宛の對比は各の代表物を抜いた意味ではなく、偶然に而して意のまゝに合したものと對照である事を斷つて置く、

演劇は音樂である、

音樂と演劇との關係は歌劇にその頂點を見出すのであるだけ龍南生活者には縁遠く感じる、オペラ座にグノ

ウのファウストがあるとはたゞ活字に知らされるだけである、ワグナーアンサイエチイが最も完全なものであらうといふのもたゞ聞くだけである、歌劇部にはシユウヂツク、アレクタアやサブコンダクタアやオヘストラやコウラスやらから成立つといふのも頼み少ない私等の智識である オペラ役者の生活に對する心細い吾人の智識はヴェデキントの Kammerseeder によつて微かに覗ふ事などに依る外はない、オペラ役者、殊に夜會と夜のレストランが生命である巴里のオペラ役者の生活の想像はデカタンの最大であらしいが事實はさうまで架空は頽廢して居らぬ中略  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
れやうとばかり骨折つた 自分の周圍の人の氣嫌を存じてはならない、殊に周圍を形くる人々のうち最も有力なマロウのためにすら出發の時間を延期しなかつた、彼はオペラ役者たる爲めにあらゆる女の誘惑を避けて煩雜な女の哀願を聞きつゝ練習の低唱を口ずさんだ、オペラ役者には強固な意志と熱心な努力と威大な體格と卓越せる天才とが必要である、タンホイゼルにはタンホイゼルの髪が必要である、藝術のための Opéra は基礎の上に立てる天才の修養によるより外にない、肉の音樂はかくして科學の音樂と互に抱擁したる交響樂の境地に達し得らるのである、コミックオペラの樂屋口には出て來る女の数だけの馬車が閉場ハナのを待つてゐる、私は女優の行狀問題に對して多くの云ふ可きものを持つては居るが雜誌の性質上遠慮して置く。

劇場音楽は科學的音樂と肉の音樂とに分類する事が出来る、Orchestra は前者の最も複雑なもので Corus が後者の集合團である、我れにあつては常盤津連、杵屋連あり獨唱は浪花政吉より雲右衛門と越路太夫と芳村伊十郎とに到るまでの研究は勘十郎の舞踊と共に後編の「我が演劇藝術」の殘照と黎明とを考ふる時に譲るの

が當然である、がこの二分類の音楽即ちめりや、や、といふ歌舞伎劇の下座や舞臺裏から響ひかせる獨吟、例へば船頭歌、などを用つて哀愁の感傷を起さしめる等の外に私は普通劇の登場俳優の白も音楽として歎へたい。劇に於ける寫實主義の感違ひ程氣持の惡いものはない「自然」といふものゝ眞義を悟り得ない者が普汎的意義の自然を銜うた程見悪いものはない

或る時常盤座を見てゐた時に武士が姿を更へやうとして剃髪する科があつた、武士は剃刀と盥と研石とを持ち出して刀をあはせ初めた、彼は武士と理髪師とを取り違へ、剃髪の殘惜を忘れて剃刀を上手に研ぐ事が寫實だと考へたらしい、彼は剃刀を十二三分間研いだ、幾度か裏かへし幾度かその先端の尖りを下して見せた、彼はその都度剃刀の刃を頭髮に觸れて切れ味を試みた、武士に扮してゐる事、その武士が髪を切る事の悲哀を全く閉却し理髪師の眞似が唯一の寫實であるならば所謂寫實は案外易々たるものである、芝居は勿論寫實であらねばならぬ、劇は人生であるからであるだが寫實は理髪師の眞似の意味でなく本來は武士でなければならぬ、看物は古の武士のたしなみが如何に卑近な事柄に迄及んでゐたかを知りたいのでなく武士がその髻を棄てる際の悲愁を感じたいのである、卯三郎の寫實は理髪師でないが故に彼の立廻りに生命がある、須磨子の寫實は剃刀の刃でないが故に彼のケタイイに生命がある、

私が俳優の口白を音楽に數ふる理由はこゝにあつた、口白は素ぐで行かなければならない、けれども素で行く事が劇の目的ではない、劇の寫實主義は性格が自由に表現するの謂ひであるから自由に表現された性格が觀客の神靈に直觀するやうなのが劇の目的である、室内の談話はいつまでたつても室内の談話であらうとしなければならぬが故に而かも觀客の耳が共鳴する事の必要よりして俳優の聲の高さの標準が高められなければ

ならぬ、俳優の聲が常に普通人のごとくあつたならば俳優は寫實主義にわざはひされて見物は喃語低聲を聴く感があるであらう、少くとも俳優の聲が普通音にて觀客に徹底するやうな練習でなければならぬ、換言すれば俳優の聲の標準が高めらるゝ事が口白が音樂であるといふことに外ならない、室内の談話は苦しき聲を張りあけてさるべきでない、

演劇は技巧である、

技巧はリアリストと正反對な方向を疾走するものであるにも拘らず演劇は自然であつて同時に技巧であらねばならぬ、兩極端にある偉大な矛盾の渾然たる合致を發見する事が黎明を我等に與ふるので技巧と云ひ寫實と云ひその本來が眞の中に滲んでゐる美の抽象が劇であるに氣付く人は偉大な矛盾が偉大な融合となるを知るのであらう、

俳優はユゴイストであつてはならない、

俳優は模倣であつてはならない、

俳優は寫生であつてはならない、

俳優は沒我でなければならぬ、

俳優は性格創作者でなければならぬ、

俳優は表現でなければならぬ、

雁次郎の治兵衛が價值ある事は雁次郎の扮した治兵衛に價值あるのではなく雁次郎自身を全く棄て、治兵衛

の性格を創作し治兵衛を表現した事に價值が存するのである、雁次郎が治兵衛として登場した時は雁次郎の治兵衛ではなく雁次郎の創作したる治兵衛の治兵衛である、雁次郎の場合は雁次郎自身が舞臺監督であるが若し他に舞臺監督が有力に存在する時は更に創作といふ意味に他の關係の附隨があつて複雑になる、其の時でも根本の創作と表現には變化はない、俳優の身体は舞臺監督の傀儡であるから純然たる自我發動の權化ではない、俳優は傀儡であつて舞臺監督は命令者である、その傀儡は自由の責任を感じ得る所の傀儡である、責任はマネジャアの命令で自由は命令の解釋である、解釋は大膽な自由を許るされて傀儡が束縛されない所作をする、所作は技巧である、技巧の練習より生ずるのである、

俳優は傀儡であり形態であり得る爲めには彼自身の性格が變更する事を必要とする、彼は二重性格であり三重性格であり五重性格であつてそれが純粹である時彼は名優である、市村羽左衛門が切られ與三に名優であるといふ意味が羽左の遷移し與う純粹の性格の一つが與三の創作に適合してゐたといふ意味である、役によつて自己を没却しその役の性格に對する理解即ち彼の創作に同感し能ふ純不純が河合武雄と東猛夫との差異である、同感し能ひて同感のまゝに自由に動き得る技巧が俳優の生命であるのだ

同感するといふは新しい見方ではない、我が歌舞伎役者にもその心持ちの人が多かつた、近頃の自然派が說出してからこれが明白になつたが私は元より自然派のいふまでに極端に排技巧を叫ばない、劇の藝術たる原因を考ゆるに當つての立脚地が自然派と異なる點がある者は彼のいふ寫實に左袒するは不可能だが自然派の言に教へられたものは充分に會得してその爲めの技巧を認めたい、寛政の實惡として有名な中村歌右衛門は脚本を解釋するに確固たる見解を持つてゐた、彼の言を「東の花勝見」が傳へてゐる、

其の役の人になりたはせることを心掛くべきものなり、清盛なれば清盛、袴垂保輔なれば保輔の、その人品人柄其の心持を考へて其の人になりたる心にて——

現代の幸四郎が劇評家に叱責さるゝは彼が意味なき技巧を弄ぶに依る、彼は輪廓に於いて優秀である、態度は堂々としてゐる、舞踊の手は充分であるに拘らず彼の見得は無意である事がある、歌舞伎の見得は誇張であり極端であり徹底の目的であるがその内部その深底にはみを起さしむる理由がなくてはならぬ、花道附際に大向をくわつと睨み一と揺り身體を揺すりさま右手に着物の裾を剝りあげると同時に、直立しての權太が見得の底には左に抱いた鉢桶がある筈だ、幸四郎の大森彦七は天下一品でありながら黒罵のあるのは根底なき誇張を散見せしむるからである 歌舞伎の技巧は根抵を忘れない技巧であつて「眞」といふものゝ寫實が初めて成功する、

オイケンとベルクソンは我等に最も多く適切なる物を教ふる人々である、吾人は畢竟ブラグマチズムから派遣された理想主義者であるといふ根抵が諸々の人生研究を惹起さしめなければならぬ 最も確かな Symbolischer Charakter des Daseins が Neo-Symbolismus & Neo-Mystik となつて現るゝはブラグマチズムの派遣せる理想主義者の特權であるのだ、眞の意味の Gottes Anschauung はプロチンやアウグスチンやスピノサの説くものと異なるものであるは進歩せる實在主義に頼つて克得するのである、オイケンは云つた、

現代精神状態の直接の印象は從來我等の生活に支障を興へたものが凡て不堅固となりそれから極めて様々の潮流が交錯混亂を來たしたとの印象である、人間の生存の根本問題に投げ返されそして尙不足になつた



過去と其所に生ずる未來との不決定なる中間時代は二つの容を示す、分潰混亂肯定否定の時であるが其の時に止むことの出来ない精神的性質が認識さるゝといふ問題が新しき震蕩を起して發展せしむる時代であるのだ、一時の間尙未成なる事の疑に對して廣く開かれた門戸は毫も恐るゝに足らない、オイケンは活動である、突進である徹底である猛進である全く統一を失へる觀を呈する現今に只我等に「行け」と命するのである絶大の懷疑から打ち散らされた火の粉をば明星だ北斗星だと八方に走り行くやうな混沌時代でも決して「絶望」でない劇しき震動は新しき發展の爲めの刺戟だと云ふのであつた、オイケンに猛進を教へられた私等は更にベルグソンに依つて藝術の目的を知らしめらるるのである、ベルグソンは云つた、自然及び精神内に於いて、換言すれば我々の内部及び外部に於いて觸感或は意識に明らかに印象されない無數の「事物」を發見するのが藝術である精神状態を描寫する詩人小説家は新奇なものゝ始作ではなく彼の作物に不可解として我等に見ゆるものでも我等が彼を了解するならばそれは我等の經驗内にあるものである、我等の見えないもの感じないものの啓示は藝術によつて達せらるる演劇が綜合の藝術である一面は彼は音楽であり技巧動作であり美術であり文學である、とを私は云つた、凡てが藝術家でない私等は演劇によつてん得とする欲望はその觸感外にある人生啓示の享受であり藝術家のに感じたる「美」の表示要求である。

凡てが眞の人生であり眞の美であるならば私等は所謂勸善懲惡劇でなくとも其所に道德を發見する筈である科學よりは即ち「眞」を得て私等の觀劇によれる創作は「人生」となりこゝに燦然たる黎明を望み得るのである

(Capolls 蝶の亡び行くやうに衰へて行く歌舞伎の「黎明が殘照か」を後編としたいと思ふ)